

会議のトピックス(III)

科学と技術のための核データ国際会議 (ND2019)

2019 年 5 月 19 日～24 日 China National Convention Center (北京)

(1) 会議概要

国際原子力機関原子核科学・応用局核データ課

大塚 直彦

n.otsuka@iaea.org

1. はじめに

本会議は 1978 年にイギリスのハウエルで第一回が開催されて以来つづいている伝統ある会議である（とは本誌の読者にはいうまでもないであるが）。2001 年以降、アジア・ヨーロッパ・アメリカで順番に 3 年おきの開催が定着している。アジアでは 2001 年に日本（つくば）、20010 年に韓国（済州島）で開催され、今回これにつづいて中国での開催となった。本会議のウェブサイトが開設された、という連絡をうけて閲覧してみたところ医学系の国際会議の案内が表示される、というようなことも初期にはあったが、とにかく会議は無事に終了したようである。まずは中国初開催を成功裏におわらせた Ge Zhigang（葛智剛）氏や Wang Wenming（王文明）氏をはじめとする中国核データセンターのみなさんの労をねぎらいたい。

今回 5 月開催となったことから、核データニュースへの報告を 6 月号掲載とするか 10 月号掲載とするか、なやましいところであったが、速報性を重視して 6 月号に掲載することとなった。講演内容を便宜的に「測定」、「評価・理論」、「核分裂」、「応用」の 4 分野に分け、各分野担当の著者のみなさんには、会議から原稿締切までの時間が限られるなか、原稿の作成にご協力いただいた。

2. 会議施設

会議が開催された China National Convention Center（国家会議中心）は天安門広場のほぼ真北の方向に位置する。2008 年の北京オリンピックの際に報道拠点ならびに競技場（フェンシング・射撃）として建設された施設を転換したものだという。大小 100 近く

の会議室を備えた巨大な施設であり、ND2019 開催中も 4 つほどの大きな会議が並行して開催されていた。「脳卒中大会」という中国国内の医師のあつまりらしき会議もあれば、火鍋のセッションを持つ仕出しの見本市のような（ちょっと気になる）催しもあった。この会議施設はとにかく巨大であった。昼食後にひとねむりできるよう、施設に併設されている宿泊施設 (China National Convention Center Grand Hotel) を手配したが、ここから我々の会議が行われている会議施設の一角 (図 1) まで距離があり、また道のりも平坦ではなかった。それで、日中に部屋にもどることは一度もなかった。



図 1 ND2019 の区画への門。奥には他の会議のために設置された門が複数見える。

最近の北京は大気汚染が深刻で青空がみえないことがめずらしくないが、風がつよかったせいか、会期中は連日青空をみることができた。ただ、会議前日にはこの強風が北京空港への飛行機の着陸をさまたげてしまい、KAERI (韓国) からの参加者一行を乗せた機体は天津の空港に臨時着陸、かれらは機内で再離陸まで数時間待機させられたようである。日中の北京は気温が連日 30 度を超える暑さであったが、湿度が低いせいか日没後はしのぎやすかった。前回 ND2017 (ブルージュ) の際には唯一空調設備のある核分裂のセッションの会議室がにぎわったようであるが、今回はいずれの会議室にも空調が完備していた。会議場東側の公園一帯にはいろいろな食堂があり、筆者はその人工池

(?) の脇にて、オリンピックタワーを模した巨大ピッチャーからビールをそそぎながらの夕食（図 2）をたのしんだ。なお会議の晩餐会は会議施設内で開催された。



図 2 ある日の夕食 - 左から奥村 (IAEA)・筆者・深堀 (IAEA)。千葉氏 (東工大) 撮影。

3. 参加状況

中国に入国する場合、ほぼすべての国の一般旅券に査証をはりつけておく必要がある（日本は例外）。主催者としては、査証のスムーズな発給が、参加者の確保のうえで重要だったかもしれない。表 1 に摘要投稿数と参加者数をまとめる。日中韓および米仏以外ではスイスとチェコの二か国が 10 名以上の参加者をだしている。スイスの参加者の多くは CERN からのものであろう。ちなみにオーストリアからの参加者 7 名のうち 6 名は NDS からの参加である（残り 1 名は Helmut Leeb 氏、基調講演をした IAEA の Melissa Denecke 部長は計上されていない模様）。会議最終日に主催者から、摘要投稿数 517 件、うち 454 件が採択、実際に講演されたのは 444 件（基調講演 5 件、全体講演 13 件、招待講演 71 件、一般講演 279 件、ポスター講演 76 件）であると報告があった。

表1 投稿された摘要数(4月12日現在)と確定参加者数(会議最終日発表)

	摘要	参加		摘要	参加
中国	139	294	ギリシャ	4	4
アメリカ	64	34	インドネシア	4	0
フランス	44	24	イラン	4	1
日本	30	28	オーストラリア	3	1
スイス	20	15	カナダ	3	2
ロシア	18	6	カザフスタン	3	0
オーストリア	17	7	モンゴル	2	1
スペイン	17	5	スロベニア	2	2
韓国	15	14	南アフリカ	2	4
スウェーデン	13	8	ブラジル	2	0
チェコ	12	10	アルゼンチン	2	2
ルーマニア	10	8	ベトナム	2	0
ドイツ	9	8	トルコ	1	1
イタリア	9	9	アルジェリア	1	0
ベルギー	7	6	ブルガリア	1	0
イギリス	7	6	イスラエル	1	0
ウクライナ	6	1	エジプト	1	0
バングラディシュ	6	0	フィンランド	1	1
ベラルーシ	6	2	モロッコ	1	0
インド	6	1	ガーナ	1	0
ポーランド	6	2	マレーシア	1	1
アラブ首長国連合	5	0	ヨルダン	1	0
ナイジェリア	4	0	合計	513	508

4. 会議の印象

会場では青ポロシャツの統一衣装をきた学生が多数きびきびうごきまわっていたのが印象的であった。われわれの会議がおこなわれている一角と施設併設のホテルや昼食会場のあいだには距離があったが、こまったら青ポロシャツの学生をみつけだせばよかった。

プログラムに掲載されていながら登壇者があらわれなかった講演がめだった。筆者が座長をつとめた木曜午前後半のセッションでも一般講演(20分)の1つとポスター講演(5分)の3つが取消となってしまった。このような場合、つぎの講演をくりあげて実施する座長がいたが、特定の講演を目当てに他の会議室から移動してくる参加者がいることが

想定されたので、筆者のセッションでは取消された一般講演については、その予定時間を休憩時間とした。参加補助がえられなかった、査証発給がまにあわなかった、など講演取消の事由はさまざまであろうが、開会時点で主催者が把握していなかった取消も多数あったようである。講演取消をした人は主催者にきちんと連絡したのだろうか、参加費の不払いをもって欠席の意思表示とした人はいなかったろうか、そんなことが気になった。中国との間では電子メールの送受信がうまくいかないことがあり、筆者も主催者と参加者の間のメールの橋渡しを何度も行った。そのような電子メール事情も主催者と参加者の間の意思疎通をむずかしくしていたかもしれない。



図3 挨拶をおこなう Ge Zhigang (葛智剛) 中国核データセンター長

核データ国際会議での講演取消で筆者がおもいだすのは、1988 年の水戸の会議で参加受付にあらわれず講演取消の連絡もなかったある人の話である [1]。「彼を水戸で見た」という目撃情報があり、そのため OHP で何度もよびだしたものの当人はいつこうあらわれない、ついに講演取消となった、という話である。今回もあるセッションで座長が講演者をよびだしても本人があらわれない。「あーまた無断取消か」と思いきや、Frank Gunsing (CEA Saclay) が「彼は近くにいるはずだ！」とって会議室をとびだし、数分後に学生とおぼしき講演者をつれて会議室にもどってきた。おかげで

彼は講演をすることができた。別セッションでも、座長がよびだした際にあらわれなかった若手の登壇予定者が、あとでのこのことあらわれた。まじめな参加者には腹立たしいことであろうが、筆者は自身の学生時代をみるような気がしたから、ちょっとおかしい気分であった。



図4 初日の基調講演会場

論文の投稿締切は当初会議一週間後の6月1日と設定されていたが、会議録の投稿要領がウェブサイトに掲載されたのは（すくなくとも筆者がそれにきづいたのは）会議がはじまってからのことで、締切は8月1日に延長された。会議録は前回のND2016と同様、EPJ Web of Conferenceに出版されるようである。主催者と1年くらい前に会議録の出版先の話題になった際には、“Review of Particle Physics”や“Atomic Mass Evaluation”のぶあつい論文を最近掲載した「中国物理C」はどうでしょうねえ、と申し上げた。しかし、この雑誌の編集委員の木村真明氏（北大）によれば、この雑誌はインパクトファクターが高く、会議録を出版するような雑誌ではないようである。今回、会議の開催業務の相当な部分を外部業者に上手に委託していたようだが、会議録の出版に関してはそうはいかないだろうし、われわれのところにも夏休みをすぎたあたりからぼつぼつと査読依頼がまいこむのでしょう。

5. おわりに

会議最終日に Lawrence Livermore National Laboratory (LLNL) の Caleb Mattoon 氏から、次回の会議を 2022 年にアメリカ西海岸のオークランドで開催する予定であることが発表された。LLNL の方々を中心に、LANL の河野俊彦氏などアメリカの複数の研究機関の方々が組織委員となるようである。

会議最終日には、九州大学大学院総合理工学府の渡辺研究室で学位をとられた北京応用物理及計算数学研究所の孫偉力さんのおはからいでウィグル料理をたのしんだ(図5)。カザフスタンではウィグル料理の店は酒をださないことも多いが、当夜は串に刺した羊肉とともに啤酒がおおいにすすんだ。

IAEA では、国際会議などに派遣できる職員は原則 1 名という制限がある。核データ国際会議といえども、ここ数回は 3 名しか派遣できず、筆者も残念ながら ND2016 への参加をのがした。今回、同僚の奥村森さんとともに、日本の核データ研究者のみなさんにまとまって形でお目にかかれたのはまことに幸いであつた。

参考文献

[1] 中川庸雄・深堀智生：「国際会議の楽屋話し」、核データニュース No.31、p.10 (1988).



図5 会議最終日の九大・北京応用物理及計算数学研究所の方々とウィグル料理の夕食